

研 究 報 告

北海道オホーツク地域における男性高齢者のボランティアの特徴

藤谷 未来

Characteristics of Volunteer in Older Adult Males
in the Okhotsk Region of Hokkaido

Miku Fujiya

キーワード：ボランティア，男性高齢者，後期高齢者

key words : volunteer, older adult males, later older adulthood

Abstract

Aim: To elucidate the characteristics of elderly males' volunteer in the Okhotsk region of Hokkaido.

Method: An anonymous, self-administered questionnaire investigating differences in attributes, volunteer motivation scale, helping effects scale and volunteering frequency was distributed to 629 elderly males currently registered as volunteers.

Results: Response rate of 33.4%, with 174 responses being subject to analysis. 81.6% partook volunteer activities for the elderly. A weak positive correlation between these activities and age was found ($\rho=0.212$, $p<0.01$), and findings indicate that the old-old participated in volunteering more frequently than young-old individuals ($U=2358.5$, $p<0.01$). Moreover, individuals over 75 years of age scored significantly higher on the helping scale total score ($p=0.003$).

Discussion: Compared to young-old individuals, old-old individuals were more likely to participate in volunteer activities for the elderly. This suggests that participation in the activities was possible regardless of age. Further, it is believed that old-old individuals obtained helping effects, such as a sense of reward and fulfillment from participating in volunteer activities.

要 旨

目的：北海道オホーツク地域における男性高齢者のボランティアの特徴を明らかにする。方法：ボランティア登録中の男性高齢者629名に無記名自記式質問紙調査を行い、ボランティア活動内容、活動継続動機尺度及び援助成果尺度と、属性との差・関連を検討した。結果：回答率33.4%、174名を分析対象とした。81.6%の人が高齢者を対象としたボランティア活動をしており、この活動は年齢との弱い正の相関がみられ ($\rho=0.212$, $p<0.01$)、前期高齢者に比べ後期高齢者の方が頻回に参加していた ($U=2358.5$, $p<0.01$)。また、援助成果の尺度合計点において75歳以上が有意に多かった ($p=0.003$)。考察：高齢者

受付日：2018年4月8日 受理日：2020年2月4日

日本赤十字北海道看護大学 Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

を対象としたボランティア活動は、前期高齢者に比べ、後期高齢者が頻回に参加していたことなどから、年齢に関係なく参加できる活動であることが示唆された。更に、後期高齢者はボランティア活動を通してやりがいや充実感といった援助成果を得ていることが考えられた。

I. 緒言

我が国の介護保険制度は、高齢者数の増加から当初の制度維持が難しく、平成27年の制度改正では、行政サービスの補完的役割にボランティアや地域の支え合いが謳われ、高齢者が支え手側に回ることの必要性も述べている（厚生労働省、2015）。しかし、全国のボランティア個人対象調査（全国社会福祉協議会、2009, p.15）では、活動者のうち60歳以上の占める割合は全体の65.7%と高齢者が半数を超えるものの、性別の内訳は男性31.0%、女性68.8%と男性が少ない結果となっている。内閣府（2011, p.224）の報告でも、過去1年間に「介護が必要な高齢者を支援する活動」などの地域・ボランティア活動をした60歳以上の男女のうち、男性が少ない結果を示していた。これらのことから、高齢者同士の互助を実現していくためには、男性高齢者のボランティア活動への参加が期待される。

先行研究において、高齢者の社会参加と身体活動量との関連性（岡本・久保田・印鑰、2015, p.53）などについての報告はみられるが、高齢者のボランティア活動に関する文献は少なく、これらの研究対象者の多くは女性であり、男性高齢者のボランティア活動の実態は明らかになっていない。男性は地域の中で孤立を招きやすい状況にあり（岸・吉岡・野尻、2011, pp.1-21）、地域保健事業などの参加が少ないことや、アプローチの難しさもある（河野・田高・岡本、2009, p.673）。

このような課題は北海道オホーツク地域でも同様に存在している。オホーツク地域は北海道の北東部に位置し、3市15町村からなる。高齢化率は33.5%で全国平均より高く、広大な土地面積に対し、人口密度は著しく低い（オホーツク総合振興局、2018a, 2018b）。これらのことから、効率よく介護保険サービスを行き届けられない現状や、自家用車が運転できなくなると生活に影響を及ぼすだけでなく、災害時の公助を適切に受けられない懸念もあるため、普段から自助・互助が必要かつ重要な地域であり、ボランティアの育成が急務な地域である。

これらのことから、オホーツク地域の男性高齢者が活動しているボランティアにはどのような活動があるのか、活動の参加・継続に必要な条件はあるのか、どのような男性高齢者が活動しているのかといった、オホーツク地域における男性高齢者のボランティアの特徴にはどのようなものがあるのか疑問を持った。

高齢者の社会活動は内容や地域によって様々な特

徴があり、それらを把握した上での支援や介入が必要（李・平川・土橋他、2010, p.79）であることから、本研究ではオホーツク地域における男性高齢者のボランティアの特徴を明らかにすることを目的とした。

II. 用語の定義

高齢者とは、一般的に65歳以上の男女を指すことが多いが、定年退職後、就労という社会とのつながりが希薄になることが考えられ、本研究では60歳以上の男女を高齢者と定義した。

ボランティアについて、自発的な意志に基づく他人や社会に貢献する活動。また、活動をする人とした。本研究において、自治会役員や民生委員・児童委員の委嘱はボランティア活動に含めなかった。

III. 研究方法

A. 研究対象者

オホーツク管内にある社会福祉協議会のボランティアセンター18か所中、同意を得た14か所においてボランティア登録をしている60歳以上の男性629名。

B. データ収集期間

平成28年7月～10月。

C. 調査方法

無記名自記式質問紙による調査。

1. 調査内容

宋（2009）の調査によると、ボランティア活動をやめたいと思った理由に一番多かったのが「体力や健康上の負担」であったことや、高齢者がボランティア活動に参加するためには属性で尋ねる疾患の有無の他に、健康であるという自覚とADLの状況が社会参加に大きく影響することが予測されたことから、属性の他に、健康感と日常生活動作能力について質問した。また、宋（2009）は、ボランティア活動の継続について、「自分自身の学びや成長のため」や、「社会貢献に参加したい」などの心理的報酬を挙げていたことから、男性高齢者がボランティア活動を継続する理由にはどのようなものがあるか、その理由となる援助成果にはどのようなものがあるのかを知ることで、ボランティア活動を推進するために、活動しやすい、または活動が継続しやすい環境を整える一助となると考えたことから、ボランティア活動継続動機と援助成果について尋ねた。具体的な調査内容について以下に示す。

a. 属性

年齢及びボランティアの活動年数、疾患の有無、仕

事の有無などを問う4項目とした。

b. 自己の健康感

介護保険制度で使用される「基本チェックリスト」から抜粋した、自己の健康感を問う7項目。尺度合計点は0点から35点である。

c. 手段的日常生活動作能力

老研式活動能力指標（古谷野・柴田・中里他, 1987, p.113）を用い、尺度合計点は0点から13点である。

d. ボランティア活動継続動機

ボランティア活動を継続する理由となる、活動を通して得る心理的な成果を言い、妹尾・高木（2003, p.118）が開発したボランティア活動継続動機測定尺度を用いた。自己志向的動機（ $\alpha=0.81$ ）5項目（尺度合計点は0点から25点）と、他者志向的動機（ $\alpha=0.81$ ）6項目（尺度合計点は0点から30点）、活動志向的動機（ $\alpha=.86$ ）5項目（尺度合計点は0点から25点）の全16項目から成る。尺度全体の合計点は0点から80点である。

e. 援助成果

妹尾・高木（2003, p.118）が作成した援助成果測定尺度によって評価される、向社会的行動において、他者との相互作用を通じて援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬を問う項目。尺度は愛他的精神（ $\alpha=0.86$ ）4項目（尺度合計点は0点から20点）、人間関係の広がり（ $\alpha=0.81$ ）4項目（尺度合計点は0点から20点）、人生への意欲喚起（ $\alpha=0.77$ ）3項目（尺度合計点は0点から15点）から構成される全11項目で、尺度全体の合計点は0点から50点である。

これらの尺度の妥当性については、妹尾・高木（2003）が当該尺度の概念を含むボランティアの内的心理過程モデルの検証を行っており、構成概念妥当性が支持されるものと考えられる、と述べている（八城, 2011）ことから使用可能と考えた。

f. ボランティア活動の内容と頻度

調査者が作成した15項目。社会福祉協議会から依頼のある主なボランティア活動の内容と、直近1年間の頻度を、7段階の順序尺度を用いて尋ねた。尺度合計点は15点から105点とした。

2. データ収集方法

社会福祉協議会の局長または担当者に、本研究の目的などについて口頭及び文書を用いて説明し、承諾・同意を得た。調査依頼文書や質問紙などを返信用封筒にセットし、担当者から研究対象者へ配付を依頼した。調査用紙は回答後、調査者へ返送することとした。

D. 分析方法

単純集計の後、ボランティア活動の頻度と、年齢・活動年数、活動継続動機、及び援助成果との相関については、Spearmanの順位相関係数を算出した。また、年齢は75歳で2群に分け前期高齢者と後期高齢者に差

がないかt検定を用い、年齢と活動頻度の差については、Mann-WhitneyのU検定を用いた。統計分析にはSPSS 21.0 for Windows (IBM) を使用し、有意水準は5%未満とした。

E. 倫理的配慮

研究への協力は自由意思であり、協力をしないことで不利益は生じないこと、データは厳重に管理することを社会福祉協議会担当者に口頭及び文書で説明した。また、対象者に対しても研究の趣旨と上記の内容を文書で説明した。

なお、本研究は、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号28-236）。

IV. 研究結果

A. 分析対象者数

対象者629名に質問紙を配付し、210名から回答があった（回収率33.4%）。このうち、大部分が無回答であった11名を除き、「現在ボランティア活動をしている」と答えた174名を分析対象とした。

B. 分析対象者の属性

対象者の平均年齢72.4（SD 6.5）歳、平均活動年数は9.8（SD 8.5）年、10年未満が54.0%、10年以上は35.5%という結果であった。職業の有無について、現在無職の人は126名（72.4%）、疾患を有する人は119名（68.4%）であった（表1）。

C. 自己の健康感

転倒に対する不安がない人が56.9%おり、自分の健康状態について、よい・とてもよいと感じている人が112名で、全体の65.5%を占めていた（表2）。

D. 手段的日常生活動作能力

日用品の買い物ができる人や請求書の支払いなど身の回りの生活行動が自立している人は99.4%おり、対象者の全員が新聞などを読むと答えた（表3）。

E. 活動継続動機

活動継続動機尺度の項目では、Cronbach α 係数は0.923であった。尺度合計点は平均点57.3（SD 16.7）、最小値0、最大値80であった。下位尺度の代表値は以下のとおり。自己志向的動機の尺度合計点は0点から25点で、平均値は16.5（SD 5.5）、他者志向的動機では、尺度合計点が0点から30点、平均値22.9（SD 5.0）、活動志向的動機の尺度合計点は0点から25点、平均値19.8（SD 3.73）となった。

F. 援助成果

援助成果尺度の項目では、Cronbach α 係数は0.935。尺度合計点の平均点は42.0（SD 7.7）であり、最小値12、最大値55であった。下位尺度の代表値は、愛他的精神では尺度合計点が0点から25点、平均値19.1（SD 3.74）、人間関係の広がりの尺度合計点4点から20点、平均値が15.6（SD 3.03）、人生への意欲喚起では、

表1. 対象者の属性

N=174			
項目	内訳	人数	%
年齢	60歳以上65歳未満	19	10.9
	65歳以上70歳未満	43	24.7
	70歳以上75歳未満	43	24.7
	75歳以上80歳未満	45	25.9
	80歳以上85歳未満	17	9.8
	85歳以上90歳未満	7	4.0
	平均年齢±標準偏差	72.4歳±6.5	
ボランティア活動年数	1年未満	5	2.9
	1年以上10年未満	102	58.6
	10年以上20年未満	43	24.7
	20年以上30年未満	17	9.8
	30年以上40年未満	4	2.3
	40年以上50年未満	2	1.1
	50年以上60年未満	1	0.6
	平均活動年数±標準偏差 中央値	9.8年±8.5 7.0年	
疾患の有無（複数回答）	有り	119	68.4
	糖尿病	24	13.8
	高血圧	75	43.1
	心臓病	19	10.9
	脳卒中	3	1.7
	がん	18	10.3
	呼吸器疾患	13	7.5
	腎臓病	5	2.9
	関節痛	38	21.8
	無し	42	24.1
	無回答	13	7.5
現在の仕事の有無	有り	45	25.9
	60歳以上75歳未満	33	19.0
	75歳以上	12	6.9
	無し	126	72.4
	60歳以上75歳未満	63	36.2
75歳以上	63	36.2	
無回答	3	1.7	

尺度合計点は3点から15点で、平均値が11.1 (SD 9.4) であった。

G. ボランティア活動の内容と頻度

各ボランティア活動の頻度を問う項目でCronbach α 係数は0.807であった。男性高齢者の参加率が高いのは、サロン活動のボランティアで77.2%が、趣味や特技を活かしたボランティアでは69.0%の人が年1回以上活動していた。さらに、社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティアの年1回以上の参加率は81.3%であった。対象者別にみると高齢者を対象としたボランティアは年1回以上参加している人が81.6%、地域全体を対象としたボランティアに年1回以上参加している人が71.3%であった。

男性高齢者の参加が少ない活動は、子どもを対象としたボランティアであり(68.3%)、特に託児のボランティアについては活動中の男性高齢者のうち94.1%の人が参加していなかった。また、通院支援のボランティアは71.8%が、外出支援のボランティアは79.2%

表2. 自己の健康感

N=174			
		n	%
毎日の生活に充実感がある	まったくあてはまらない	4	2.3
	あまりあてはまらない	9	5.3
	どちらともいえない	29	17.0
	少しあてはまる	68	39.8
	非常にあてはまる	61	35.7
	計	171	100.0
これまでと同じように楽しんでたことを楽しめる	まったくあてはまらない	3	1.7
	あまりあてはまらない	10	5.7
	どちらともいえない	21	12.1
	少しあてはまる	72	41.4
	非常にあてはまる	68	39.1
	計	174	100.0
これまで楽にできていたことが億劫に感じる	まったくあてはまらない	16	9.2
	あまりあてはまらない	38	22.0
	どちらともいえない	23	13.3
	少しあてはまる	86	49.7
	非常にあてはまる	10	5.8
	計	173	100.0
わけもなく疲れた感じがする	まったくあてはまらない	18	10.5
	あまりあてはまらない	49	28.5
	どちらともいえない	20	11.6
	少しあてはまる	76	44.2
	非常にあてはまる	9	5.2
	計	172	100.0
定期的な運動をしている	まったくあてはまらない	14	8.0
	あまりあてはまらない	23	13.2
	どちらともいえない	20	11.5
	少しあてはまる	63	36.2
	非常にあてはまる	54	31.0
	計	174	100.0
転倒に対する不安がある	まったくあてはまらない	54	31.0
	あまりあてはまらない	45	25.9
	どちらともいえない	23	13.2
	少しあてはまる	43	24.7
	非常にあてはまる	9	5.2
	計	174	100.0
現在の自分の健康状態をどう感じるか	とてもわるい	1	0.6
	わるい	8	4.7
	どちらともいえない	50	29.2
	よい	100	58.5
	とてもよい	12	7.0
	計	171	100.0

が参加していなかった。

1. 年齢とボランティア活動頻度の差

前期高齢者と後期高齢者では身体的・精神的・社会的に大きく異なることから、75歳を基準に2群に分け、前期高齢者と後期高齢者に差がないかを検討した。高齢者を対象としたボランティア (U=2358.5, $p<0.01$) に月1回程度、週1回以上参加しているのは後期高齢者が有意に多かった。趣味や特技を活かしたボランティアも同様に後期高齢者が週1回以上参加していた (U=2354.5, $p<0.01$)。庭の手入れのボランティア (U=2472.0, $p<0.01$)、清掃活動のボランティア

表3. 手段的日常生活動作能力

	N=174	
	n	%
バスや電車などを使って 一人で外出ができますか	はい	166 96.0
	いいえ	7 4.0
	計	173 100.0
日用品の買い物ができますか	はい	173 99.4
	いいえ	1 0.6
	計	174 100.0
自分で食事の用意ができますか	はい	153 89.0
	いいえ	19 11.0
	計	172 100.0
請求書の支払いができますか	はい	173 99.4
	いいえ	1 0.6
	計	174 100.0
銀行預金、郵便貯金の出し入れが 自分でできますか	はい	169 97.1
	いいえ	5 2.9
	計	174 100.0
年金などの書類が書けますか	はい	171 98.3
	いいえ	3 1.7
	計	174 100.0
新聞などを読んでいますか	はい	174 100.0
	いいえ	0 0.0
	計	174 100.0
本や雑誌を読んでいますか	はい	149 86.1
	いいえ	24 13.9
	計	173 100.0
健康についての記事や番組に 関心がありますか	はい	160 92.0
	いいえ	14 8.0
	計	174 100.0
友達の家を訪ねることがありますか	はい	130 74.7
	いいえ	44 25.3
	計	174 100.0
家族や友達の相談にのることがありますか	はい	148 85.1
	いいえ	26 14.9
	計	174 100.0
病人を見舞うことができますか	はい	171 98.3
	いいえ	3 1.7
	計	174 100.0
若い人に自分から話しかけることが ありますか	はい	161 93.6
	いいえ	11 6.4
	計	172 100.0

($U=2299.5$, $p<0.05$) も週1回以上参加している後期高齢者が多いことが示された(表4).

2. 属性とボランティア活動頻度の相関

a. 年齢とボランティア活動の相関

ボランティア活動の頻度と年齢の間に相関がみられた項目は、趣味や特技を活かしたボランティア ($\rho=0.256$, $p<0.01$), 高齢者対象のボランティア ($\rho=0.212$, $p<0.01$) であり、いずれも有意な弱い正の相関がみ

られた。また、庭の手入れ、住宅掃除、清掃活動と年齢の間にも弱い正の相関があった ($\rho=0.202\sim0.324$, $p<0.01$)。これらのボランティア活動は年齢が高くなるほど活動に参加していると言える。

b. 活動年数とボランティア活動頻度の相関

活動年数と相関があったボランティアは通院支援 ($\rho=0.251$, $p<0.01$), 交通安全指導 ($\rho=0.261$, $p<0.01$), 子どもを対象としたボランティアであり ($\rho=0.221$, $p<0.01$), いずれも有意な弱い正の相関が認められた(表5)。このことから、活動年数を重ねるほど、通院支援や交通安全指導、及び子どもを対象としたボランティアに参加していると言える。

3. 活動継続動機とボランティア活動頻度の相関

活動継続動機尺度の下位尺度全てと、尺度合計に有意な弱い正の相関がみられた項目は趣味や特技を活かしたボランティア ($\rho=-0.255\sim0.304$, $p<0.01$) であった。さらに、サロン活動のボランティア ($\rho=0.178\sim0.254$, $p<0.01$), 社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティア ($\rho=0.196\sim0.283$, $p<0.01$), 高齢者を対象としたボランティア ($\rho=0.170\sim0.234$, $p<0.01$) と尺度合計点との間にも弱い正の相関が認められた(表6)。

4. 援助成果とボランティア活動頻度の相関

趣味や特技を活かしたボランティア活動は、援助成果尺度の全ての下位尺度と尺度合計点に有意な弱い正の相関が認められた ($\rho=0.214\sim0.289$, $p<0.01$)。この他に、尺度合計点と相関がある活動は外出支援のボランティア ($\rho=0.216$, $p<0.01$) と、社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティア ($\rho=0.223$, $p<0.01$) であり、これらの活動に参加するほど援助成果を得られていた。

5. 属性とボランティア活動継続動機の関連

75歳を基準に2群に分け、全下位尺度・尺度合計点に有意差があるかt検定を行った結果、「友人を得ることができる」「毎日の生活に充実感がでる」といった活動志向的動機において、75歳未満に比べ75歳以上が有意 ($p=0.033$) に多かった。活動志向的動機をもってボランティア活動をしている人が75歳以上に多くみられると言える(表7)。

6. 属性と援助成果の関連

75歳を基準に2群に分け、全下位尺度と尺度合計点に有意差があるかt検定を行った結果、下位尺度のうち、「仲の良い友達ができた」といった人間関係の広がり ($p=0.01$) と「やりがい生まれた」などの人生への意欲喚起 ($p=0.032$), 尺度合計点 ($p=0.003$) において75歳以上が有意に多い結果であった。これらのことから、ボランティア活動を通して、人間関係の広がりや人生への意欲喚起といった援助成果を、前期高齢者より後期高齢者が感じていると言える。

表4. ボランティア活動と年齢

N=174

		活動して いない n (%)	年 1回程度 n (%)	半年に 1回程度 n (%)	3ヶ月に 1回程度 n (%)	月に 1回程度 n (%)	月に 2回程度 n (%)	週 1回以上 n (%)	合計 n (%)	U	有意確率 (両側)
サロン活動	60歳～74歳	27 (26.2)	9 (8.7)	15 (14.6)	12 (11.7)	17 (16.5)	7 (6.8)	16 (15.5)	103 (60.2)	2685.0	.009
	75歳以上	12 (17.6)	5 (7.4)	5 (7.4)	5 (7.4)	14 (20.6)	6 (8.8)	21 (30.9)	68 (39.8)		
	合計	39 (22.8)	14 (8.2)	20 (11.7)	17 (9.9)	31 (18.1)	13 (7.6)	37 (21.6)	171 (100.0)		
趣味活動	60歳～74歳	38 (36.9)	10 (9.7)	6 (5.8)	7 (6.8)	12 (11.7)	16 (15.5)	14 (13.6)	103 (61.3)	2354.5	.001
	75歳以上	14 (21.5)	1 (1.5)	5 (7.7)	3 (4.6)	7 (10.8)	15 (23.1)	20 (30.8)	65 (38.7)		
	合計	52 (31.0)	11 (6.5)	11 (6.5)	10 (6.0)	19 (11.3)	31 (18.5)	34 (20.2)	168 (100.0)		
庭の手入れ	60歳～74歳	43 (41.0)	5 (4.8)	8 (7.6)	9 (8.6)	10 (9.5)	10 (9.5)	20 (19.0)	105 (61.4)	2472.0	.001
	75歳以上	14 (21.2)	5 (7.6)	4 (6.1)	3 (4.5)	8 (12.1)	4 (6.1)	28 (42.4)	66 (38.6)		
	合計	57 (33.3)	10 (5.8)	12 (7.0)	12 (7.0)	18 (10.5)	14 (8.2)	48 (28.1)	171 (100.0)		
住宅掃除	60歳～74歳	58 (55.8)	1 (1.0)	4 (3.8)	1 (1.0)	5 (4.8)	6 (5.8)	29 (27.9)	104 (60.8)	2758.0	.014
	75歳以上	21 (31.3)	3 (4.5)	5 (7.5)	3 (4.5)	5 (7.5)	5 (7.5)	25 (37.3)	67 (39.2)		
	合計	79 (46.2)	4 (2.3)	9 (5.3)	4 (2.3)	10 (5.8)	11 (6.4)	54 (31.6)	171 (100.0)		
家事手伝い	60歳～74歳	58 (55.8)	1 (1.0)	2 (1.9)	4 (3.8)	3 (2.9)	4 (3.8)	32 (30.8)	104 (60.5)	2818.0	.015
	75歳以上	23 (33.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (5.9)	6 (8.8)	8 (11.8)	27 (39.7)	68 (39.5)		
	合計	81 (47.1)	1 (0.6)	2 (1.2)	8 (4.7)	9 (5.2)	12 (7.0)	59 (34.3)	172 (100.0)		
通院支援	60歳～74歳	78 (74.3)	3 (2.9)	1 (1.0)	8 (7.6)	12 (11.4)	1 (1.0)	2 (1.9)	105 (60.3)	3345.5	.282
	75歳以上	47 (68.1)	2 (2.9)	1 (1.4)	4 (5.8)	9 (13.0)	4 (5.8)	2 (2.9)	69 (39.7)		
	合計	125 (71.8)	5 (2.9)	2 (1.1)	12 (6.9)	21 (12.1)	5 (2.9)	4 (2.3)	174 (100.0)		
外出支援	60歳～74歳	89 (84.8)	2 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.9)	3 (2.9)	9 (8.6)	105 (60.7)	3068.5	.028
	75歳以上	48 (70.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.9)	3 (4.4)	5 (7.4)	10 (14.7)	68 (39.3)		
	合計	137 (79.2)	2 (1.2)	0 (0.0)	2 (1.2)	5 (2.9)	8 (4.6)	19 (11.0)	173 (100.0)		
送迎	60歳～74歳	78 (74.3)	0 (0.0)	4 (3.8)	5 (4.8)	6 (5.7)	3 (2.9)	9 (8.6)	105 (60.7)	3322.5	.329
	75歳以上	47 (69.1)	1 (1.5)	1 (1.5)	2 (2.9)	2 (2.9)	5 (7.4)	10 (14.7)	68 (39.3)		
	合計	125 (72.3)	1 (0.6)	5 (2.9)	7 (4.0)	8 (4.6)	8 (4.6)	19 (11.0)	173 (100.0)		
清掃活動	60歳～74歳	32 (30.5)	21 (20.0)	24 (22.9)	12 (11.4)	9 (8.6)	4 (3.8)	3 (2.9)	105 (60.7)	2299.5	.000
	75歳以上	12 (17.6)	9 (13.2)	6 (8.8)	3 (4.4)	18 (26.5)	6 (8.8)	14 (20.6)	68 (39.3)		
	合計	44 (25.4)	30 (17.3)	30 (17.3)	15 (8.7)	27 (15.6)	10 (5.8)	17 (9.8)	173 (100.0)		
託児	60歳～74歳	95 (92.2)	1 (1.0)	1 (1.0)	3 (2.9)	0 (0.0)	1 (1.0)	2 (1.9)	103 (60.6)	3284.5	.194
	75歳以上	65 (97.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	67 (39.4)		
	合計	160 (94.1)	1 (0.6)	1 (0.6)	5 (2.9)	0 (0.0)	1 (0.6)	2 (1.2)	170 (100.0)		
交通安全指導	60歳～74歳	79 (75.2)	5 (4.8)	5 (4.8)	6 (5.7)	3 (2.9)	4 (3.8)	3 (2.9)	105 (60.7)	3239.0	.195
	75歳以上	45 (66.2)	3 (4.4)	7 (10.3)	2 (2.9)	7 (10.3)	0 (0.0)	4 (5.9)	68 (39.3)		
	合計	124 (71.7)	8 (4.6)	12 (6.9)	8 (4.6)	10 (5.8)	4 (2.3)	7 (4.0)	173 (100.0)		
社協手伝い	60歳～74歳	15 (14.3)	19 (18.1)	21 (20.0)	15 (14.3)	16 (15.2)	12 (11.4)	7 (6.7)	105 (61.4)	3399.5	.708
	75歳以上	17 (25.8)	7 (10.6)	11 (16.7)	6 (9.1)	10 (15.2)	7 (10.6)	8 (12.1)	66 (38.6)		
	合計	32 (18.7)	26 (15.2)	32 (18.7)	21 (12.3)	26 (15.2)	19 (11.1)	15 (8.8)	171 (100.0)		
高齢者対象	60歳～74歳	20 (20.4)	10 (10.2)	14 (14.3)	15 (15.3)	8 (8.2)	12 (12.2)	19 (19.4)	98 (60.1)	2358.5	.004
	75歳以上	10 (15.4)	3 (4.6)	5 (7.7)	1 (1.5)	13 (20.0)	9 (13.8)	24 (36.9)	65 (39.9)		
	合計	30 (18.4)	13 (8.0)	19 (11.7)	16 (9.8)	21 (12.9)	21 (12.9)	43 (26.4)	163 (100.0)		
子供対象	60歳～74歳	65 (63.7)	11 (10.8)	8 (7.8)	6 (5.9)	3 (2.9)	5 (4.9)	4 (3.9)	102 (61.1)	2914.0	.111
	75歳以上	49 (75.4)	5 (7.7)	5 (7.7)	1 (1.5)	0 (0.0)	4 (6.2)	1 (1.5)	65 (38.9)		
	合計	114 (68.3)	16 (9.6)	13 (7.8)	7 (4.2)	3 (1.8)	9 (5.4)	5 (3.0)	167 (100.0)		
地域対象	60歳～74歳	28 (28.0)	15 (15.0)	22 (22.0)	13 (13.0)	9 (9.0)	3 (3.0)	10 (10.0)	100 (59.9)	3105.5	.416
	75歳以上	20 (29.9)	6 (9.0)	11 (16.4)	6 (9.0)	13 (19.4)	6 (9.0)	5 (7.5)	67 (40.1)		
	合計	48 (28.7)	21 (12.6)	33 (19.8)	19 (11.4)	22 (13.2)	9 (5.4)	15 (9.0)	167 (100.0)		

Mann-WhitneyのU検定

表5. 年齢・活動年数とボランティア活動頻度の関連

		ボランティア活動頻度														
		サロン活動のボランティア	趣味や特技を活かしたボランティア	庭の手入れのボランティア	住宅掃除のボランティア	家事手伝いのボランティア	通院支援のボランティア	外出支援のボランティア	送迎のボランティア	清掃のボランティア	託児のボランティア	交通安全指導のボランティア	社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティア	高齢者を対象としたボランティア	子どもを対象としたボランティア	地域全体を対象としたボランティア
年齢	相関係数	.176*	.256**	.240**	.202**	.190*	.103	.152*	.025	.324**	-.021	.085	-.065	.212**	-.154*	.072
	有意確率 (両側)	.022	.001	.002	.008	.012	.176	.046	.743	.000	.785	.264	.397	.007	.047	.353
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
活動年数	相関係数	.077	.099	.017	.091	.125	.251**	.120	.091	.165*	.033	.261**	.195*	.147	.221**	.148
	有意確率 (両側)	.318	.200	.825	.238	.102	.001	.114	.234	.030	.667	.001	.010	.062	.004	.057
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167

Spearmanの順位相関係数 *: p<.05 **: p<.01

表6. 活動継続動機・援助成果とボランティア活動頻度の関連

		ボランティア活動頻度														
		サロン活動のボランティア	趣味や特技を活かしたボランティア	庭の手入れのボランティア	住宅掃除のボランティア	家事手伝いのボランティア	通院支援のボランティア	外出支援のボランティア	送迎のボランティア	清掃のボランティア	託児のボランティア	交通安全指導のボランティア	社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティア	高齢者を対象としたボランティア	子どもを対象としたボランティア	地域全体を対象としたボランティア
自己志向的動機	相関係数	.254**	.287**	.154*	.170*	.132	.175*	.229**	.186*	.098	.118	.071	.245**	.170*	.219**	.201**
	有意確率 (両側)	.001	.000	.044	.026	.085	.021	.002	.014	.198	.126	.352	.001	.030	.004	.009
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
活動継続動機	相関係数	.202**	.255**	.080	.034	.017	.004	.133	.059	.067	.024	.034	.196**	.221**	.085	.064
	有意確率 (両側)	.008	.001	.299	.661	.820	.959	.082	.444	.378	.755	.656	.010	.005	.276	.414
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
活動志向的動機	相関係数	.178*	.304**	.146	.098	.092	.072	.190*	.083	.168*	.048	.121	.254**	.199*	.167*	.118
	有意確率 (両側)	.020	.000	.056	.204	.228	.346	.012	.276	.027	.538	.112	.001	.011	.031	.127
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
尺度合計	相関係数	.217**	.290**	.128	.096	.071	.095	.198**	.120	.116	.135	.086	.260**	.215**	.204**	.155*
	有意確率 (両側)	.004	.000	.096	.210	.353	.212	.009	.115	.127	.079	.261	.001	.006	.008	.046
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
愛他的精神の高揚	相関係数	.147	.214**	.056	.069	-.015	.069	.159*	.125	.137	.039	.134	.188*	.128	.083	.105
	有意確率 (両側)	.055	.005	.463	.368	.844	.362	.036	.101	.072	.614	.079	.013	.102	.286	.175
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
人間関係の広がり	相関係数	.188*	.254**	.170*	.107	.138	.166*	.196**	.060	.195*	.023	.132	.204**	.192*	.206**	.206**
	有意確率 (両側)	.014	.001	.026	.165	.072	.029	.010	.437	.010	.771	.083	.007	.014	.007	.008
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
援助成果尺度	相関係数	.141	.265**	.173*	.090	.101	.116	.233**	.044	.151*	.028	.107	.175*	.073	.082	.150
	有意確率 (両側)	.066	.001	.023	.240	.188	.126	.002	.567	.046	.722	.161	.022	.352	.290	.053
	N	171	168	171	171	172	174	173	173	174	170	173	172	163	167	167
尺度合計	相関係数	.186*	.289**	.141	.104	.076	.131	.216**	.068	.181*	.027	.135	.223**	.144	.131	.161*
	有意確率 (両側)	.016	.000	.069	.182	.326	.089	.005	.381	.018	.725	.079	.004	.069	.094	.040
	N	168	165	168	168	169	171	170	170	171	167	170	169	160	164	164

Spearmanの順位相関係数 *: p<.05 **: p<.01

表7. 活動継続動機・援助成果と年齢の比較

		75歳未満 (n=105)		75歳以上 (n=69)		有意確率 (両側)
		n		n		
活動継続動機	自己志向的動機	平均	16.92	17.10	0.803	
		SD	4.497	4.735		
	他者志向的動機	平均	18.81	19.30	0.337	
		SD	3.380	3.219		
活動志向的動機	平均	23.50	24.86	0.033		
	SD	4.207	3.897			
尺度合計		平均	59.37	61.26	0.243	
		SD	10.873	9.651		
援助成果	愛他的精神の高揚	平均	14.85	15.62	0.101	
		SD	3.116	2.916		
	人間関係の広がり	平均	15.10	16.30	0.006	
		SD	3.260	2.505		
	人生への意欲喚起	平均	10.77	11.59	0.032	
	SD	2.614	2.198			
尺度合計		平均	40.68	43.96	0.003	
		SD	8.410	6.011		

t検定

V. 考察

A. オホーツク地域におけるボランティア活動をしている男性高齢者の特徴

本研究の対象者は、70歳代が最も多く、全体の約5割を占めていた。内閣府（2011, p.61）の調査によると、過去1年間にボランティア活動をしたことがある60歳以上の高齢者のうち最も多いのは60代で、70代は35.5%であった。これらのことから、オホーツク地域でボランティア活動を行っている男性高齢者は全国平均と比較してやや高齢といえる。これは、全国に比べオホーツク地域に高齢化の進展がみられることと、後期高齢者も全国の14.0%（総務省統計局, 2018）に比べ、オホーツク地域は17.4%（オホーツク総合振興局, 2018a）と、高い割合を占めていることが影響していると考えられる。

職業においては、全国調査でボランティア活動をしている人は定年退職後の人が多いと報告されており、本研究も同様に約7割の人が無職であった。仕事を有している人より余暇ができるため、ボランティア活動をしやすいことが考えられる。

本研究の対象者は7割弱が何らかの疾患を抱えているが、自身の健康状態を概ね良いと感じ、日常生活動作が自立している人が多い。佐藤・大淵・河合他（2012, p.23）の研究においても、社会活動をしている人は主観的健康感が良好であるという結果が示されており、先行研究同様の結果が示された。

B. オホーツク地域の男性高齢者がしているボランティア活動の特徴

男性高齢者が多く参加していた趣味や特技を活かしたボランティアは活動継続動機尺度と援助成果尺度の下位尺度全てと尺度合計との相関がみられたことから、趣味や特技を活かしたボランティア活動は男性高齢者にとって今までの経験を活かし、得意なことを披露する場となるなど、趣味や特技の延長として楽しめる活動と考えられる。趣味や特技を活かしたボランティア活動は男性高齢者にとってやりがいを持ち、続けやすい活動であると考えられる。他に、参加率の高い取り組みとしては社会福祉協議会や役所の事業・行事ボランティアや地域全体を対象としたボランティア、高齢者を対象としたボランティアといった活動があった。その中でも、高齢者を対象としたボランティアに参加している男性高齢者は、後期高齢者が多かった。高齢者は一般的に加齢に伴い日常生活動作や手段的日常生活動作が低下し、閉じこもりがちな生活となってしまうやすい。伏木・大西・大浦他（2012, pp.75-77）や福島（2012, p.48）の研究においても、後期高齢者に比べ、前期高齢者のほうがボランティア活動への参加意欲が高いことや、年齢が高くなるにつれ身体機能の低下が進み、参加意向の低下に結びついていることを示唆している。しかし本研究では、前期高齢者に比べ後期高齢者の参加が有意に多く、かつ頻繁に活動をしていたボランティアがあることが示された。さらに、高齢者を対象としたボランティア活動は、年齢との弱い相関もみられていることから、年齢に関係なく健康で活動的であれば継続できる活動であると考えられる。活動を通して友人を得たり、やりがいや充実感をもって活動に参加していることが一因として考えられる。高齢者を対象としたボランティア活動は高齢者同士の支え合いを意味し、今後行政サービスの補完的役割として期待されている重要な活動であることから、このような活動のより一層の活性化や、充実を目指し、地域特性に合った支援が必要であると考える。

男性高齢者の参加が少ない託児のボランティアなど、子どもを対象としたボランティアは、全国調査でも同様に、子育て（乳幼児）に関する活動は女性では23.0%であるのに対し男性は6.3%という結果を示している。このことは、長年培われた性役割意識や、育児に携わった経験の性差が影響していることがうかがえる。しかし、子どもを対象としたボランティアは活動年数と活動継続動機尺度との間に弱い正の相関がみられていることから、子どもを対象とした活動に参加している人は少ないが、活動年数を重ねる毎に子どもを対象としたボランティアに参加している可能性や、活動継続動機に繋がることを示唆された。大場（2014, p.64）は、世代間交流活動の担い手として男性

高齢者の期待は大きいと述べている。次世代に伝える役割をもってもらうと、男性高齢者も子どもを対象としたボランティアに参加しやすいのではと考えた。

送迎・外出支援・通院支援のボランティアについては、土地面積の広いオホーツク地域では活動に車の運転が必要という共通点があり、積雪地帯であることや、近年高齢者ドライバーの事故が多発していることなどから、男性高齢者は車の運転が必要な活動を避ける傾向があると考えられる。通院支援の活動をしている男性高齢者は少ないが、活動年数との相関をみると弱い正の相関がみられた。このことから、活動年数が長い男性高齢者ほど通院支援のボランティアに参加していることがうかがえる。土地面積が広く、交通機関が発達していないオホーツク地域では、高齢者の「足」の確保が喫緊の課題であるため、今後は安全に活動が参加・継続できるような仕組み作りが必要と考えられる。

VI. 本研究の限界

本研究はある一地域の特徴が明らかとなったことにもすぎず、回収率が33.4%であることからバイアスが生じている可能性があり、地域によって、ボランティア活動に差がないのかについても精査が必要である。また、対象者に女性も加え性差に焦点を当てると、男性の特徴がより明確となったと考える。

謝辞

調査にご協力頂きましたボランティアの皆様、社会福祉協議会様に厚くお礼申し上げます。さらに、日本赤十字北海道看護大学河口てる子教授、西片久美子教授につきましては、多忙な中ご指導をいただき深く感謝申し上げます。

なお、本研究は日本赤十字北海道看護大学学内研究奨励費の助成により実施致しました。

本研究は、日本赤十字北海道看護大学大学院の修士論文に加筆修正し、その要旨を第18回日本赤十字看護学会学術集会で発表しました。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文献

福島忍 (2012). 単身高齢者の地域活動・ボランティア活動への参加の促進に関する研究：都営住宅に居住する単身高齢者への調査を通して。目白大学総合科学研究, 8, 41-50.

伏木康弘・大西浩文・大浦麻絵・尚和里子・坂内文男・北澤一利・森 満 (2012). 地域ボランティア参加意志を持つ高齢者の特性：石狩，空知振興局

管内4市3町に在住者への調査。北海道公衆衛生学雑誌, 25(2), 139-146.

岸恵美子・吉岡幸子・野尻由香・望月由紀子・小長谷百絵・浜崎優子・野村祥平・米澤純子 (2011). セルフ・ネグレクト状態にある独居高齢者の特徴：地域包括支援センターを対象とした全国調査の結果より。帝京大学医療技術学部看護学科紀要, 2, 1-21.

河野あゆみ・田高悦子・岡本双美子 (2009). 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題：高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析。日本公衆衛生雑誌, 56(9), 662-673.

古谷野亘・柴田博・中里克治・芳賀博・須山靖男 (1987). 地域老人における活動能力の測定。日本公衆衛生雑誌, 34(3), 109-114.

厚生労働省 (2015). 介護予防・日常生活支援総合事業の適切かつ有効な実施を図るための指針。https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000184376.pdf (2018/12/20)

内閣府 (2011). 平成23年度高齢者の経済生活に関する意識調査 第2章8 地域活動・ボランティア活動に関する調事項。https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h23/sougou/zentai/pdf/2-8.pdf (2019/1/10)

オホーツク総合振興局 (2018a). 北海道の高齢者人口の状況（市町村別）。http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/khf/h30koureishajinnkousityousonn.pdf (2019/3/1)

オホーツク総合振興局 (2018b). 道内市町村の概要。http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/scs/gyousei/shityousondata.htm (2019/3/1)

大場宏美 (2014). 地域高齢者の generativity と社会参加活動との関連構造。生きがい研究, 20, 52-67.

岡本尚己・久保田晃生・印鑰真人 (2015). 地域在住高齢者における趣味・社会活動参加と身体活動量の関連。東海大学紀要, 45, 51-55.

李在億・平川毅彦・土橋敏孝・武田誠一 (2010). 「元気高齢者」の生きがいと社会参加：新潟市中央区「老人憩いの家」利用者調査結果から。新潟青陵学会誌, 3(1), 73-80.

佐藤むつみ・大淵修一・河合恒・新井武志・小島成実 (2012). 都市部在住高齢者における社会活動参加者の特性：介護予防の推進に向けた基礎資料。厚生 の指標, 59(4), 23-29.

宋美英 (2009). ボランティア活動の継続・発展とボランティア組織の構造：福祉ボランティア活動を事例に。北海道大学大学院教育学研究院紀要, 109, 51-80.

妹尾香織・高木修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果。社会心理学研究, 18(2), 106-118.

総務省統計局 (2018). 人口推計の結果の概要。https://

www.stat.go.jp/data/jinsui/2.html#monthly (2019/3/1)
八城薫 (2011). 5 対人行動—援助. 堀洋道監修, 吉
田富二雄・宮本聡介編, 心理測定尺度集V—
個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉

(pp.223–231). 東京：サイエンス社.
全国社会福祉協議会 (2009). 全国ボランティア活動実
態調査. http://www.shakyo.or.jp/research/20140808_09volunteer.pdf (2018/10/25)